いの流水俳壇

松尾　満津於　選

「当季雑詠」

川上こよね

無位無冠の気楽さ駅のアイスクリン

（評）肩書きのない気楽さを前面に出して、成功している。いや味がなく、さっぱりとした句である。暑い最中駅のホームで、誰憚ることなく冷いアイスクリンを立食する、その爽快さがたまらないのである。字余りになっても矢張り「氷菓子」と云ったのでは、このアイスクリンの感じは出て来ない。

中屋　桜子

田草取り早も空になる大薬缶

（評）薬缶は銅、真鍮などで作った容器である、もともと薬を煮るのに用いたところからこの名で呼ばれているが、現今では野良仕事等のとき湯沸かし用として重宝されている。すべての事象が「早も空なる」に凝縮されており省略の限りの中で、情景のよく見える句である。

岡本とも子

身をかくすときも灯して蛍かな

（評）夏の夜空に蛍の飛び交う情景は、まことに風雅な趣をもっている。ホタルは人間の生活に何の害を及ぼすものではないが、その存在が美しいだけに、人間の身勝手な情感で捕まえたりもするが、身を隠すときも灯されているという宿命、何処か人間生活にも通ずるものがあるような気がする。

弘瀬うき子

老鶯のさえずり聞くや宮の森

（評）「老鶯」は夏の鶯のことである。春の鶯は鳴き方に、ぎこちなさがあるが、夏も深まってくると風景に調和して余韻が生まれる。説明しなくても情景は鮮明なる句である。作者の住む宮の森といえば、場所も限定される。巨木、叢林の中までは夏の太陽の光は届かない。宮の外縁に涼を取りながら、鶯の声を聞いて、気持ちよい眠気に誘われているのではなかろうか。

中野　好子

いごっそう貫く夫や初鰹

（評）頑固一徹で自説を曲げず、一度心に決めたら金輪際動かない。それでいて人間的には案外単純で、さっぱりとしていて、逆らうことをしなければ機嫌悪くもない性格を持った人のことを、土佐の方言で「いごっそう」と呼んでいる。二合位の地酒と一皿の鰹の刺身が晩酌について、それが習慣となっている。何かひと昔前の日本の家庭の姿を想起させられる句である。夫婦という固い絆の裏打ちがあればこそ、こんな直截な句が生まれるのであろう。

友草　水月

耳も眼も達者白寿の豌豆飯

間　浩太

風鈴に乙女座からの風届く

竹崎　光子

牛飼いの夫と余生も草を刈る

渡辺万利子

あじさいや慈雨にめぐまれ彩冴える

森　洋彦

夕影に面輪ただよう曼陀羅華

大川　節弥

幽艶の彩を疎水に濃紫陽花

筒井　眉躬

椎の花全山活きて色どりぬ

片岡　包女

一様に育つ青田の水澄めり

川村千図子

独り居という気楽さの昼寝かな

川村　愛

椎の花真っ盛りとて見るばかり

川村　博子

耳慣れて寝床に親し遠蛙

小島　良

対岸の山を見上げて桑を解く

松岡きよ子

姿鮨好みし義母の年忌祭

津田　久美

風薫る朝の挨拶一年生

楠目　哲朗

春秋や黄金色して広がりぬ

伊藤　たみ

余生なほ生きぬく力今年竹

鈴木　公子

ふる里の山の香も添え新茶着く

松尾満津於

鮎の川夜明けが動く解禁日

次題「当季雑詠」五句

締切　毎月　15日

投句先

いの町吾北教育事務所

いの町上八川甲2010

☎867―2133

第33回吾北地区ふるさとまつり花火大会

日　時

8月13日（土）18時～21時

雨天の場合

8月14日（日）

場　所

吾北中・上八川小グランド

内　容

・吾北清流太鼓

・鳴子踊り

・花火大会

・ウルトラクイズ

・サマージャンボボール

※いずれのゲームも景品があります。

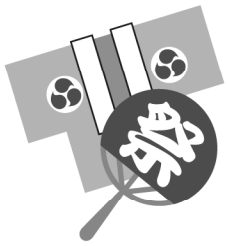
・出店

・その他

混雑が予想されます。

乗り合わせなどでご来場ください。

問い合わせ先

633（むさざび）美観光協会

☎867―2314